



## 蠣崎松濤詩集『松濤詩草』訳注 其八

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 泊, 功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000456">https://doi.org/10.32150/0002000456</a>

# 蠣崎松濤詩集『松濤詩草』 訳注 其八

泊 功

## 一、はじめに

函館市中央図書館所蔵「蠣崎文書」中の一書、『松濤詩草』（蠣崎松濤著、全三百三首）の訳注其八である。蠣崎松濤、本名は伴茂。元は松前藩の上席である下国家の弥左衛門加賀。将監流蠣崎家である蠣崎波響の孫娘園と結婚し、蠣崎別家を興す。前回の訳注の公表から時間が経過しているの、以下にこれまで発表した訳注其一〜七までの書誌を記す。

- ① 「訳注其二」一番詩〜二〇番詩（全三百三首に便宜的に番号を付している。『函館工業高等専門学校紀要』四十八号、二〇一四）。
- ② 「訳注其二」二二番詩〜四五番詩（『函館工業高等専門学校紀要』第四十九号、二〇一五）。
- ③ 「訳注其三」四六番詩〜七四番詩（『人文論究』第八十五号、二〇一六）。
- ④ 「訳注其四」七五番詩〜一〇〇番詩（『函館工業高等専門学校紀要』第五十二号、二〇一七）。
- ⑤ 「訳注其五」一〇一番詩〜一三一番詩（『函館工業高等専門学校紀要』第五十二号、二〇一八）。
- ⑥ 「訳注其六」一三一番詩〜一五〇番詩（『人文論究』第八十七号、二〇一八）。
- ⑦ 「訳注其七」一五一番詩〜一八〇番詩（『函館工業高等専門学校紀要』第五十三号、二〇一九）。

今回訳出する一八一番詩から二〇九番詩までは、テキストに残された書き付けによると、壬寅（天保十三年、一八四二）から癸卯（天保十四年、百九十七番詩以降）の年の間に作られている。作者が二十五歳前後の時の作品である。詩題下に付された漢字一字は、その詩の韻を示している。また、原文の引用に際しては、読みやすさを考慮して通用字体を用い、ルビ・送り仮名も現代仮名遣いとする。

## 二、一八一番〜二〇九番詩までの書き下し文、注釈、通釈

一八一番 冬日遊禪房（冬日禪房に遊ぶ） 十一月廿六日御会 尤

尋幽曳杖到山頭 幽を尋ね 杖を曳き 山頭に到る

雪失帰程一宿投 雪に帰程を失い 一宿投す

説尽老僧禅味意 説き尽くす 老僧 禅味の意

人間塵想此時休 人間の塵想 此の時休まん

（語釈）

○御会：藩校徽典館で行われる詩会で藩主が出席するもの。

（通釈）

幽境を探して杖をつきながら歩き、山の中までやってきた。雪のため  
に帰路を見失って、近くの禅寺に一夜の宿を求めたが、その老僧と  
禅の心を語り尽くした。わが俗世間での雑念も今夜ばかりは脳裏から  
消えるだろう。

一八二番 客夜聞雁（客夜 雁を聞く） 十二月朔日御会 庚

一夜寒風眠不成 一夜の寒風 眠り成さず

空囊弊裘旅魂驚 空囊くうのう 弊裘へいきさゆ 旅魂驚く

歸心輾轉他鄉恨 歸心 輾轉として他郷を恨む

臥聽雲辺孤雁声 臥して聴く 雲辺 孤雁の声

（語釈）

○空囊弊裘：空の財布とよれた皮衣。○旅魂驚：杜甫「夜」詩「空山  
 独夜 旅魂驚く」をふまえたもの。「旅魂」は旅人の心。故郷への  
 思いがかき立てられること。○輾轉：気持ちが落ち着かなくて何度も  
 寝返りをうつこと。○孤雁：一羽の雁。雁は故郷へ音信を伝える鳥と  
 される。

（通釈）

一晩中吹きすさぶ風の寒さによく眠れない。すっからかんの懐に、よ  
 れた皮衣では寒さもしのげないが、それでもつい旅愁がかき立てられ  
 る。寒さと故郷を思う気持ちのせいで眠れぬまま何度も寝返りをうつ  
 て他郷にいることを恨みに思う。横になつていと空遠くから一羽故  
 郷へ帰っていく雁の声が聞こえてきた。

一八三番 雪後尋山家（雪後 山家を尋ぬ） 同月六日御会 斎

独鞭瘦馬向長隄 独り瘦馬に鞭うちて長隄に向かう

積雪埋蹊道欲迷 積雪 蹊を埋め 道に迷わんと欲す

借問隔川高士屋 借問す 川を隔つる高士の屋

牧童指教一峰西 牧童指さして教う 一峰の西

※原文には結句「指教」の脇に「遥指」（遥かに指さす）という書き  
 付けがある。「七点」（批点）がついていないので、この語も最終テキ  
 ストの候補であった可能性がある。以下においても、七点がついてい  
 ない詩中の書き付けがあれば、あり得たテキストの参考として注記す  
 る。

（語釈）

○牧童指教：転句の「借問」と併せて、杜牧「清明」詩の「借問す  
 酒家何れの処にか有る 牧童遥かに指さす杏花村」をふまえる。似た  
 ような表現は本稿二〇一番詩「江畔尋花」他にも使われていて、松濤  
 お気に入りの表現であつたらしい。

（通釈）

ひとりで我が瘦せ馬に鞭を当てて長い土手に向かったが、積雪で道が  
 消えてしまい迷いそうになつてしまった。川を隔てた向こうにある高  
 人の家を訊ねると、牧童はある山の西方を指さして教えてくれた。

一八四番 哭伯父雪雲軒（伯父雪雲軒を哭す） 晩冬六日 陽

通名登 下国氏

佳人新失幾悲傷 佳人 新たに失い 幾悲傷

塚上招魂一線香 塚上 魂を招く 一線の香

慟絶難截不歸路 慟絶するも截ち難し 不歸の路みち

何期此日淚千行 何ぞ期せん 此の日 涙千行なるを

（語釈）

○雪雲軒：雪雲軒は号、通称登。伴茂の父下国李隣の兄。○慟絶：悲  
 しみのあまり気を失うこと。○不歸路：後戻りできない死出の道。

（通釈）

すばらしい人を失つたばかりで、その悲しみは測り知れない。死者の  
 魂を呼び戻すかのように、墓の上からひとすじ線香の煙が立ち昇る。  
 正気を失うほど慟哭してはみたものの、伯父の死出の旅路を断ち切る  
 ことはもはやできないのだ。涙があふれて止まらないこの日をどうし  
 て予期できただろうか。まったく思いもしなかつたことだ。

一八五番 至日（至日） 同月十日徽典館宿題 陽

輕暖東風催綠楊 輕暖たる東風 綠楊を催しうなが

独登台入詩腸 独り台上に登れば詩腸に入る

生生広漠梅開日 生生広漠として 梅開く日  
添得青陽一線長 添へ得たり 青陽 一線の長きを

(語釈)

○至日：夏至と冬至。ここでは後者。○宿題：詩会の前にあらかじめ詩題が出されていること。○軽暖：すこしの暖かみ。○詩腸：詩心、詩ができそうな心もち。○生生：万物が次々と生じて変化する兆し。○広漠：なにもない空間が広がっている様。○青陽：五行説で青は春にあたることから、春の異称。○一線長：冬至の日から一日ごとに一本の線ほどわずかずつ日が長くなって春の気配が加わってくること。

(通釈)

暖かみを帯びた東風が柳の葉が青むのをうながすようだったので、ひとり高台に登って四望すると、詩情が昂ってきた。春になり万物のうつろう兆しが目の前に広がる。その景色のなか、梅の花が開く日には、わずか一線ほどだが春の日差しも長くなるというものだ。

一八六番 冬日即事(冬日即事) 同月十一日御会 寒

冷艶如花表祥雪 冷艶たること花のごとき祥を表す雪  
三千銀界白漫漫 三千銀界 白漫漫  
迎朋酌酒忘寒处 朋を迎え 酒を酌み 寒きを忘るる处  
好景簾凭檻看 好景 簾を褰け 檻に凭れて看る

(語釈)

○三千銀界：仏教で全宇宙を指す三千世界と広大な雪景色をかけた語。○処：「時」と同様の意味。

(通釈)

清冷たる美しさが花びらにも似た瑞雪が降った。真っ白な三千銀世界が無辺に広がっている。友人と一緒に酒を飲んで部屋が寒いのも忘れた頃、簾をかかげては、おぼしまにもたれながら眼前に広がる美しい雪景色を眺める。

一八七番 雪晴眺望(雪晴の眺望) 晩冬十六日御会 先

江村曉色日娟娟 江村の曉色 日々娟々たり  
緩歩吟魂野水辺 緩やかに歩む吟魂 野水の辺  
巧似風光三月半 巧く似たり 風光 三月の半ばに  
数枝著雪自花鮮 数枝 雪を著け 自ら花は鮮やかなり

(語釈)

○娟々：幽遠で美しい様。

(通釈)

河畔の村で迎える明け方はいつも幽遠で美しい。そこで詩人(であるわたし)は水辺をゆったりと散歩する。折よくそこは三月も半ばの景色のようだ。いくつかの枝に雪が載っていて、(そのコントラストで)春の花も自然と鮮やかに見えたのだ。

一八八番 冬夜見梅(冬夜 梅を見る) 灰

冷淡横斜路上梅 冷淡なり 横斜せる路上の梅  
新暄始見春意回 新暄始めて見る 春意の回るを  
東風昨夜伝消息 東風 昨夜 消息を伝う  
数点今朝花較開 数点 今朝 花較開く

(語釈)

○新暄：冬至が過ぎて、暖かさの気配を感じ始める。

(通釈)

外を歩きながら枝を横に伸ばした梅を眺めると、それはまだ冷たい蕾で花咲く気配がなかった。冬至が過ぎて訪れた暖気に、ようやく春の気配がめぐるのを感じ始めたところだ。(そう言えば)昨夜の東風は春の開花の知らせではなからうか。今朝になったら梅のつぼみがいっつか綻んでいた。

一八九番 苦寒（寒きに苦しむ） 江

奇寒徹骨勝他邦 奇寒 骨に徹すること他邦に勝り  
密雪随風飛入窓 密雪 風に随ひ飛びて窓より入る  
煨酒唯飲温火閣 酒を煨て 唯だ火閣に温まるを飲ぶ  
陶詩吟誦对書釘 陶詩 吟誦して書釘に対す

（語釈）

○煨酒：酒を温めること。「煨」は灰の中に残る埋すみ火。南宋の詩人范成大「冬日田園雜興詩 其八」に「地炉煨酒煖如湯」（地炉に酒を煨れば煖かきこと湯のごとし）とある。入谷仙介氏によれば、范成大の詩は、江戸期山本北山翻刻の「范成大詩鈔」によつて親しまれたということなので、あるいは松濤もそれによつてこの詩語を得たのかもしれない。○火閣：こたつ。○書釘：書物を読むための灯火。

（通釈）

この稀なる寒さが骨身に徹することといつたら他のお国とは大違い。細かな雪が窓の隙間から入りこむ。唯一の楽しみは酒を爛して炬燵で温まることだ。熱燗を一杯飲りつつ灯火の前で陶淵明の詩を朗誦する。

一九〇番 歳暮小集（歳暮の小集） 同月廿一日御会 魚

市店人忙属歲除 市店 人の忙しきは歳除に属すればなり  
閑身迎客煮寒蔬 閑身 客を迎え 寒蔬を煮て  
煎茶麦飯慇懃勸 煎茶 麦飯 慇懃に勧め  
直率生平常晏如 直率 平生 常に晏如たり

（語釈）

○寒蔬：粗末なおかず。「疏」は野菜。○直率：飾らずありのまま。

（通釈）

市や商店で人がせわしなくしているのは大晦日だからであらう。ただ閑居の身であるわたしは、粗末な菜を煮て客人を迎えている。煎茶や麦飯を懇ろにすすめる。わがありのままの生活は、歳末であつてもいづもこのように静かで落ち着いている。

一九一番 守歳（守歳） 同月廿五日徽典館宿題 寒

喧喧世業門前鬧 喧喧たる世業に門前鬧く  
偏借窮陰一夜闌 偏に借しむ 窮陰の一夜闌なるを  
兒女只飲新錦着 兒女の只だ飲ぶ 新錦を着るを  
明朝風俗对椒盤 明朝の風俗 椒盤に對せん

（語釈）

○世業：世間での務め。○窮陰：冬の終わり。陰曆十二月。○闌：夜が更けていくこと。年が暮れること。○椒盤：山椒など薬味を入れた酒、屠蘇。正月に飲んで一年の無病息災を願う。

（通釈）

（年の瀬も深まり）世の中もあれこれ騒々しく、我が家の門前もにぎやかである。大晦日（年が明けのを起きて待ちながら）、この最後の一夜が更けていくのをひたすら惜しむ。ただ子供たちは（翌朝に）おろしたての晴れ着を着るのをひたすら楽しみにしているようだ。（わたしも）元旦の習慣だから屠蘇を嗜もう。

一九二番 冬日遊山亭（冬日 山亭に遊ぶ） 同席上 真

乘閑雪後訪松筠 閑に乗じて 雪後 松筠を訪ぬ  
別業山圃幽澗浜 別業 山に囲まるる幽澗の浜  
佳興伝杯憑檻見 佳興 杯を伝えて 檻に憑りて見れば  
梅花馥郁一枝新 梅花 馥郁として一枝新たり

（語釈）

○松筠：松と竹。○幽澗浜：静かな谷間。浜は海に限らず水辺のこと。

（通釈）

降雪がやんだあとで閑に任せて野に入り、（冬でも枯れない）松や竹を探す。わが別荘は山に囲まれた静かな谷間にある。興が乗ってきたので（一緒に）こゝまで来た友に酒を注ぎながらおぼしまに寄りかかつて眺めると、梅の香りが馥郁と漂ってきた。一本だけ咲いたばかりの枝があつたのだ。

一九三番 山中隔雪（山中 雪に隔たる） 微

偶訪草廬人跡稀 偶草廬を訪ぬれば人跡稀に

俄観四望雪霏霏 俄に四望を觀れば雪霏霏たり

山神住我知何用 山神の我を住むるは知る何の用ぞ

幾日同雲不放帰 幾日か雲に同じて放帰せしめず

（語釈）

○霏霏：雨や雪がひどく降る様。

（通釈）

山の中で偶然にも粗末な庵を見つけたので訪れてみると、そこは人の気配も稀な空間だった。ふと四方を觀察すると雪がひどく降ってきた。山の神がこのわたしをここに留め置こうとするのは何の必要があったことだろうか。数日間、雪雲と一緒に山から帰してくれなかった。

一九四番 雪夜煎茶（雪夜 茶を煎る） 虞

一夜飄飄寒透膚 一夜 飄飄として 寒 膚に透る

幽期親友共围炉 幽期ありて親友と共に炉を囲まんとし

携瓶払雪敲氷去 瓶を携へ 雪を払い 氷を敲きて去け

解渴新芽蟹眼玉 渴きを解く 新芽 蟹眼の玉

（語釈）

○幽期：ひそやかな約束、または雅会の約束。○飄飄：風が激しく吹く様。○蟹眼：茶を沸かすときに出る泡。蟹の目に似ていることから。

（通釈）

一晚中風がひゅーひゅーと吹きすさび、寒さが肌を突き刺す。（そのような夜は）親友と優雅な集いをしようと期していたのを思い出して、一緒に囲炉裏を囲もうと外へ出た。酒瓶を腰にくくりつけ、雪を払い、水をたたき割りながらたどり着くと、友は我が喉の渴きを癒すためにこぼこぼと新茶を沸かしていてくれた。

一九五番 冬暖（冬暖） 元

生生日日消寒氣 生きたる日に寒氣消え

体減一衣冬又温 体 一衣を減ずるも冬又温かし

梅樹花辺風信至 梅樹の花辺に風信至り

南軒曝背似春暄 南軒に背を曝せば春暄に似たり

（語釈）

※承句「減一」の脇に襪衣（足袋と衣服の意）、「花辺」の脇に「即今」（目下、たたいまの意）とある。

（語釈）

○生生：前出。○風信：季節の風。ここでは春の暖気を含んだ風。○南軒：南向きの軒。○曝背：日向ぼっこをする。

（通釈）

万物が変化するなかで日々寒気が緩んでいく。我が身からも衣服を一枚減らしてみたが、冬にも関わらず暖かい。梅の花が咲いているあたりには春の暖かみを帯びた風が届いているのだろう。南側の軒で背中を陽にさらすと、まるで春の暖かさのようだ。

一九六番 除夜（除夜） 晚冬廿六日御会 先

須臾已似箭離弦 須臾にして已に箭の弦を離るるに似たり

独酌酒卮惜流年 独り酒卮に酌みて流年を惜しむ

梅柳暗催春意動 梅柳 暗に催す 春意の動くを

凄寒半減五更天 凄寒 半ば減ず 五更の天

（語釈）

○五更：夜を初更から二時間ずつ五つに分けた最後。だいたい午前四時ごろ。

（通釈）

除夜の時はあつという間に過ぎて、すでに弦から放たれた弓矢のように早い。わたしは盃に独酌しながら、行く年を惜しんでいる。梅や柳の様子はひそやかに春の気配が動き出すのをせきたてているかのよう

だ。それに新年の東の空が明けてくると、冬のきびしい寒さも半減していることだろう。

一九七番 歳旦（歳旦） 灰

幾度鶏鳴曙色催 幾度かの鶏鳴 曙色を催し

南山佳気彩雲開 南山の佳気 彩雲開く

堪歎四海昇平日 歎びに堪う 四海昇平の日

迎客慇懃侑寿杯 客を迎えて 慇懃に寿杯を侑む

※詩題脇に「天保癸卯年」（天保癸卯の年）という書き付けがある。本詩からは天保十四年の作となる。

（語釈）

○昇平：世の中がよく収まって太平の世であること。

（通釈）

何度も鳴く鶏の声が初日の出を導いてくるかのようだ。南の方角にある山には清らかな気が立ち昇り、空には彩雲が広がる。この天下太平の一日はまったく喜びにたえない。家では年始の客を迎えて心をこめて長寿を祈る酒を勧める。

一九八番 又（又） 孟春元日御会 先

天鶏唱罷覚安眠 天鶏唱い罷わりて安眠覚め

寒尽韶光日影延 寒尽きて 韶光に日影延ぶ

不識山家無宝曆 山家に宝曆無きを識らざるも

南枝開日は新年 南枝の開く日 是れ新年

（語釈）

○天鶏：伝説上の鳥で、每朝天下の鶏に先んじて鳴くとされる。○韶光：春のうららかな景色。○山家無宝曆：宝曆は曆の尊称。新年の曆を指す。承句の「寒尽」も含めて、太上隠者「人に答う」詩の「山中に曆日無し 寒尽くれども年を知らず」をふまえる。山中には曆がな

いので、寒さが終わって年が明けても、今年が何年だったかもわからない、と世俗にこだわらない様子を表す。

（通釈）

天鶏の声が止み、安眠から醒めて元旦を迎える。きびしい冬の寒さも終わって、（年が改まり）春のうららかな景色のなか、日も長くなるというものだ。山棲みの家に新年の曆が無いかは知らないが、南向きの梅の枝が咲いたらその日が新年だ。

一九九番 春郊晚帰（春郊より晚く帰る） 微

携酒尋春入翠微 酒を携え春を尋ねて 翠微に入る

新紅探得弄芳菲 新紅 探し得て芳菲を弄ぶ

初驚返照家村遠 初めて驚く 返照 家村の遠きを

馥郁花香滿袖帰 馥郁たる花香 袖に満たして帰らん

（語釈）

○翠微：靄の立ちこめる緑の山々 ○返照：夕陽。

（通釈）

酒瓶を腰にくくりつけて春を探しに靄の立ちこめる青山を尋ねる。咲いたばかりの紅色をした春の花を探し当て、そのよい香りを楽しむ。いまふと気づいたのだが、すでに夕陽が我が家のある村を遠く照らす時刻となっていた。馥郁とした花の香りを袖いっぱい包んで帰路を急ごう。

二〇〇番 又（又） 正月六日御会 冬

童報東郊春色濃 童は報ず 東郊 春色濃かなるを

乘晴閑歩促吟筇 晴に乗じて閑歩し 吟筇を促す

半開半落真堪賞 半ば開き半ば落つるは真に賞するに堪う

花惜祇園日没鐘 花は惜しむ 祇園 日没の鐘に

※起句「童報」の脇に「聞説」（聞説く）、転句「賞」の脇に「留」（留

むるに)、結句「花惜」の脇に「人酔」(人は酔う)とある。

(語釈)

○吟筇：詩人の杖。○祇園：本来は釈迦教団のための僧坊である、いわゆる祇園精舎のことだが、ここでは松前にある寺を指す。

(通釈)

子どもが東の郊外はもう花が咲いて春の景色が濃くなっているよ、と教えてくれた。晴れ空に誘われてゆるゆると外を歩き、詩人は杖を前に進める。花が半ば咲き、半ば散る様子はまさに愛でるに値する。そういう花の姿を見ると、寺から聞こえる日暮れの鐘の音も相俟って、散る花とともに行く春がいつそう惜しまれる。

二〇一番 江畔尋花(江畔に花を尋ぬ) 同月十一日御会 齋

同人六七此相携 人 六七と前に此に相携え

江畔探芳意欲迷 江畔に芳を探して 意迷わんと欲す

借問呼舟早花発 舟を呼び 早に花の発くを借問すれば

慇懃指教断橋西 慇懃に指さして教う 断橋の西と

(語釈)

○携：連れ立って行く。○断橋：途中で壊れた橋

(通釈)

六七人の雅友と互いにここまで連れ立って、川辺で芳しい花を探すが、見つからずに迷ってしまいそうだ。川を行く船を呼びつけて花の咲く場所を訪ねて見ると、(船頭は)断橋の西のあたりだと指さして教えてくれた。

二〇二番 春日野望(春日の野望) 東

探景逍遥西又東 景を探ね 逍遥して西又東

孤城遠眺淡煙中 孤城 遠く眺む 淡煙の中

駐筇幾度聞鶯語 筇を駐めて 幾度か鶯語を聞けば

気暖花明樹樹紅 気は暖かく 花は明らかに 樹樹は紅なり

※結句「暖」の脇に「爽」(さわやか)「霽」(はれ)とある。

(語釈)

○孤城：ぼつんと孤立している城市。

(通釈)

春のよい景色を探して、西東とよろよろ歩き回ると、淡い春霞のなかにぼつんと佇む遠くの街が見えた。杖を停めてはいくたびか鶯の鳴く声を聞いていると、春の気はすでに暖かく、花も咲き誇って木々は紅色に染まっていることに気がついた。

二〇三番 答古田氏見寄(古田氏の寄せらるるに答う) 益雄子

文 時に同氏ユウフツ勤番

胡天日暮憶風雲 胡天の日暮 風雲を憶い

尺素投来得細聞 尺素 投じ来たりて 細聞を得たり

玉案難酬我才拙 玉案に酬い難きは 我が才の拙なきによる

深情託雁不成文 深情 雁に託すも文を成さざらん

(語釈)

○古田氏：久保泰編『松前藩家臣名簿』(私家版、二〇二一、以下『名簿』)によれば、松前藩士古田益雄。『名簿』が参照した各種史料には記録がないようだが、題下注から、益雄は天保十四年に勇払勤番として出張していたことがわかる。『名簿』によれば、嘉永六年(一八五三)、二人は中書院詰めになっている。おそらく二人は同世代で家格も近く、以前より友人関係にあったのだろう。益雄は勤番先から松濤に手紙を寄せた。○尺素：短い手紙。○玉案：相手の机に対する尊称。相手そのものを指す。○雁：古来、手紙を届ける使者として詩に詠まれる。

(通釈)

(君のいる)朔北の日暮れ時の風や雲を思う。手紙が届いてそちらのくわしい様子がわかったのだ。だが君への返信が難しいのは、わたしに文才がないからだ。我が深情を北へ向かう雁へ託してみるが、きつとまっとうな文にはなるまい。

二〇四番 哭芦錐先生（芦錐先生を哭す） 刪 紀三郎鈴木氏  
空留遺草去無還 空しく遺草を留め 去りて還る無く

夢裏分明見昔顔 夢裏 分明 昔顔を見る

事業一朝猶未畢 事業 一朝 猶お未だ畢はらず

悲傷君早厭人間 悲しみ傷む 君の早に人間を厭うを

（語釈）

○紀三郎鈴木氏：鈴木紀三郎、本名重盛。詩題の芦錐は号か。『名簿』によれば、紀三郎は寺社奉行、藩家老といった要職を歴任し、天保十三年十一月十六日、京都にて没している。○遺草：生前に遺した詩文。

（通釈）

生前の遺稿はむなしくのこされたが、あなたはもはやこの世界へもどって来るはずもない。夢の中では昔日の尊顔ははっきりと浮かんできた。ただその生前の志をあなたはまた遂げていなかった。あまりに早くこの世を去ってしまったわたのを悲しみ悼むのみである。

二〇五番 聞笛（笛を聞く） 庚

高樓一曲誰家子 高樓の一曲 誰が家の子ぞ

奇韻穿雲吹笛声 奇韻 雲を穿つ 笛を吹く声

月下徘徊傾耳処 月下徘徊して耳を傾けし処

歸心新動故園情 歸心 新たに動かす 故園の情

（語釈）

○誰家子：李白「春夜 洛城にて笛を聞く」詩の起句「誰が家の玉笛ぞ 暗に声を飛ばす」をふまえる。○故園情：李白前掲詩の結句「何人か故園の情を起こさざらん」をふまえる。

（通釈）

高殿から音楽が聞こえてくるがいったい誰が吹いているのだろうか。すばらしい笛の調べが雲を突き抜けていくようだ。月明かりの下、歩き回りながらその旋律に耳を傾けていると、それまで忘れていた里心

がついてつい故郷の家を思い出してしまふ。

二〇六番 寄古田氏（古田氏に寄す） 支 益雄子

昔遊屈指歳星移 昔遊 指を屈せば 歳星 移ろい

日夜天涯思旧知 日夜 天涯に旧知を思う

春到辺塞梅発否 春 辺塞に到りて 梅の発くや否や

近来此地賞花時 近来 此の地は花を賞する時

（語釈）

○古田氏：二〇三番詩参照。○歳星：木星の異称。「歳星移る」で時が移り変わる事。○辺塞：当時、梁川から復領した松前藩が管理していたユウフツ会所（地方産品の交易・監督施設）は、松前藩による対ロシア警備が強化され、松濤はそれを唐代辺塞にたとえた。

（通釈）

昔ともに遊んだころから歳月を指折数えると、知らず時がうつろつていた。そしていまは昼も夜も天涯にいる旧友を思う。春の気配は君がいる辺塞にも届いて梅の花は開いたかね？最近、ここ松前では花を賞する季節になったのだが。

二〇七番 売花翁（花を売る翁） 正月廿五日徽典館宿題 灰

野翁辛苦数株梅 野翁の辛苦せし数株の梅

歳歳傾心手自栽 歳歳 心を傾けて手自ら栽う

勿笑王公我衣弊 笑う勿かれ 王公 我が衣の弊なるを

花香滿袖担春来 花香 袖に満ち 春を担いて来たる

※承句「歳歳傾心」の脇に「培養工夫」（培養工夫して）とある。

（語釈）

○王公：身分の高い人。

（通釈）

田舎爺さんが手塩にかけた数株の梅。毎年心をこめて自分の手で植え

ている。(爺さんが言う。)高貴なお人よ、我が破れ衣を笑わないでくれ。これでも梅の香りを袖いっぱい満たして春を運んでいるのだから。

二〇八番 春夜月(春夜の月) 同十六日御会 寒

夜色十分自在看 夜色 十分 自在に看る

軽風剪剪带余寒 軽風 剪剪として 余寒を帯ぶ

窓前一刻千金価 窓前の一刻 千金の価

月照花間影上欄 月 花間を照らし 影 欄おぼしまに上る

(語釈)

○十分：思うまま、自在に。○剪剪：風がうすら寒い様子。○一刻千金：蘇軾「春夜」詩の「春宵一刻值千金」をふまえる。

(通釈)

春の夜の景色を思うままに眺める。そよ風はまだ冷たく、余寒を帯びているようだ。だが窓の前で過ぐす一時は千金に値する。月が花の間を照らし、光と花の影がおぼしまにも上って美しい。

二〇九番 花亭新晴(花亭の新晴) 同廿一日御会 微

別院庭中紅四圍 別院の庭中 紅 四もを囲み

偷香蜂蝶一双飛 香を偷ひすむ蜂蝶 一双飛ぶ

伝杯彩筆添佳興 杯を伝へ 彩筆もて佳興を添ぶへ

花気醉人不放帰 花気 人を酔はせて放帰せしめず

(語釈)

○彩筆：美しい筆から転じて、ここでは美しい詩文。  
(通釈)

別邸の庭は春の花で四方を紅色に囲まれている。その花の香りを盗むかのように花びらの中から一對の蜂と趙が飛び立つ。(花に惹かれて四阿に集まった詩人たちは)盃を互いに注ぎながら詩を詠じ、さらに興を添える。花の香気は詩人たちを陶醉させてなかなか家へ帰してくれない。

注

1 吉川幸次郎監修、入谷仙介著『中国古典選34 宋詩選 下』(朝日新聞社、一九七九)、九三頁。

(函館工業高等専門学校)